平和の処方箋―戦争廃棄のための考察（2）

小林　直樹

まえおき

戦争は防ぎ得ないものだろうか。それが巨大な悪であり災害であることが分かっていても、戦争を抑制することはできないだろうか。結論を先にいえば、戦争の防止・抑制はできるし、又しなければならないと思う。――これに対して、戦争は不可避なものであり、したがってそれに備え、已むなければ戦うべきだ、という考え方が、昔からあったし今もある。たしかに、人類の発達段階のある時期までは、人間は互いに同類・同胞であるという認識に乏しく、「敵」は打倒・せん滅するしかない存在だとして、殺しあうのが当然であるような時代があった。その頃までは又、戦争が勝利者に多大な利益（領土の獲得、賠償金その他の収益、古代では奴隷や婦女子の入手など）を齎（もた）らすという〝誘いの動機（インセンティブ）〟もあった。しかし、今日では人間の認識も進み、戦争の惨害がどんな利益をも上まわることが明らかになり、戦争必至論は、理性的にものごとを考えるかぎり、成り立たなくなっている。地球の破壊や人類の絶滅をも生ずる戦争は、何としても防止しなければならない。更に進んで、戦争という愚劣な制度を廃棄することは、まさに現代における人類共通の課題になりつつある。

むろん、戦争の完全な絶滅は、今でも至難の仕事である。人間の闘争心や権力欲、民族的な敵対感情や競争心、不平等とそれに対する憤懣などは、至るところで再生産され、絶えざる紛争の種となっているからである。戦争がペイしないことが分かっていても、激情に駆られて流血をも辞さなくなる、という人間の性情はそう簡単には変わらないからでもある。――戦争をやめさせるためには、やはりその原因となる凡ゆる問題点にメスを入れ、その根を絶つ努力が必要となる。ここではその為に、前に見ておいた戦争の原因となるファクターを一つ一つつぶしていく仕方で、平和の処方箋を書く試みに入りたい。但し（紙幅の制約もあるので）、主として客観的要因に重点をおいて見ていくことにする。戦争を誘発する社会的諸条件をチェックし、それを解消していくことが、当面第一の課題となる。

（A）客観的要因の解消・是正

a　経済・社会的不平等の解消を図ること

富める者と貧しい者との格差が拡がり、対立が激化すれば、国内・国際の秩序が不安定になることは、前に繰りかえし見てきたところである。紛争・テロ・戦争を防ぐために、第一に為されなければならないのは、経済・社会的格差を極小にし、不平等への憤激を生じないようにすることである。第二次大戦後、「南北問題」として注目されてきた国際的な不平等、とくに「南」側の大量の極貧層の産出は、各地での紛争やテロリズムの温床ともなってきた。正義および人権の観点からしても、国際と国内をとわず、経済難民の救済は、優先的課題であった筈である。しかし、多くの場合、この課題は果たされず、貧困問題との本格的取り組みは甚だ不十分であった。むしろ、テロや紛争を〝抑圧〟するために、専ら軍事力で壊滅しようとする手近で安易な方策をとるのがふつうであった。しかし、そのような暴力的対処は、一時（いっとき）の成果をあげたとしても、紛争・テロの根源を解決せず、かえって逆に、原因を拡大再生産するような結果に陥るのが通例である

る強力な要因は沢山ある。その実現は、口でいうほど簡単ではない。とくに軍備拡大を欲する軍部や軍需産業がつよく結合しているところでは、軍備縮小は至難の業（わざ）となる。しかし、戦争を廃棄して人間の安全を保障するためには、軍縮の達成は、やはり必須の条件である。諸国家（諸国民）の安全を保障する方策を手始めとして、人類はその総智を傾けて、その達成を図るべきである。それと共に、軍備を不要にする世界連邦制の実現は、軍縮の手段であり、目標ともなる課題として、真剣に考察されねばならない。

なお、戦争への圧力を増大する、人口の過剰・資源（とくに食糧）不足などの解消も、長期的には重要な要件となる。aの条件と並行して、地球政策の立案・実施が国連中心に進められるべきであろう。

（B）主観的要因（戦争を促す欲情）の抑制・転換

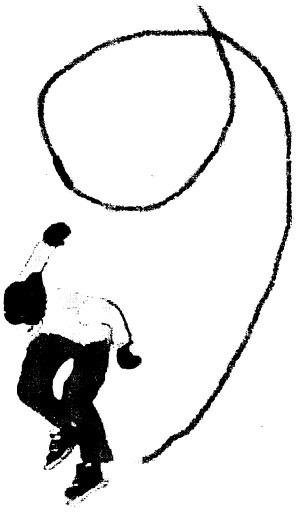
上述の諸条件にはすべて、諸国民の心（欲求・情念・意志）の問題が絡んでいる。例えばaには不平等への憤激を解消するために、正義や人権の意識が働くことになろう。bやcには、安全感や名誉心を充たすために、国家エゴイズムを抑える和同・連帯の精神が必要である。また衝突の原因（もと）となる相互の不信感や憎しみの感情に代わる寛容の精神が求められる。従って、（A）の諸条件と切り離して、主観的要件だけを考察する意味は余りないといっていい。ただ、諸国民が共存に不可欠な右のような心の条件を整えるために、最低限何が必要かを考えておかなければならないだろう。

第一に、危機や戦争に対処するという理由で、真っ先に「防衛力」の強化とか、有事法制の整備とかの、軍事優先の政策をとることは禁物である。互いに不信と不安を作り出す「仮想敵」の設定こそ、戦争を誘発する最初の危険な一歩となる。その「敵」に対抗する軍備は、戦争に直近の火薬庫となろう。何らかの「危機管理」の準備は必要だろうが、その前提として中心とすべき方針は、総合的な平和政策でなくてはならない。戦争の準備は、前述したとおり、戦争を惹き起こす重要な要因だから、〝先ず備えを〟という発想は、戦争防止策としては本末顛倒（あべこべ）の愚策である。

第二に、諸国民の共生のための相互理解と寛容の精神を進める方策は、平和＝互恵の外交を始めとして、環境保全の協力や学術・スポーツ等の交流、平和教育の強化など沢山ある。互いに狭量なナショナリズムを戒めて、政治・経済・学術のほか、民間レベルでの交流を日常化する複合的政策が必要である。その実行によって、戦争の原因を解消していくことが最良策になるといえよう。

さいごに、地球上から戦争の悲惨と愚行を放逐するために、諸国民は人間としての同胞意識を育み、各地域に欧州共同体（EC）のような広域のコミュニティを作る努力が望まれる。それらをステップとして、地球共同体（当面の目標としては世界連邦）にまで進めば、戦争の完全な克服を実現することができるだろう。それが単なる夢にすぎないかどうか、私達市民から構想をたてみようではないか。

（こばやし・なおき、法律学者、本会会員）



（9・11後にアフガンやイラクに侵攻したブッシュの戦争の失敗は、その典型例である）。戦争・テロを防止するには、先ず社会・経済的格差の解消という、正義の理念に沿う福祉政策の実施に向かうべきである。

b　宗教的・民族的対立の寛解

その多くは、長い歴史的な軋轢を背負っているから、完全な融和の達成は極めて困難である。とくに異宗教間の対立は、とかく双方の「原理主義」者たちが前面に出てくるために、妥協を許さない衝突になり易い。それはまた、相互に閉鎖的で〝話し合い〟の通路を持たないために、紛争がこじれて流血の惨事を生ずると、互いに憤怒と怨恨を燃えたたせ、果てしない武力闘争の原因（もと）ともなる。――人間の共存を妨げるこの対立は、人間の情念や信条に根ざし、しかも多くは長い歴史を背負っているために、至極厄介で治癒しにくい慢性的な難病に似ている。このため、お互いの集団は、長い時間をかけても、その根本的な治療に努めないと、互いの成員を不毛な戦いに生命をかけさせ、不幸でみじめな消耗品のように消費させることになろう。しかしそれは、「民族の栄光」や「教義の守護」といった美名で、煽ったり正当化したりしてはならない、生命の不当な犠牲というべきものである。根ぶかい情念のからむ民族や集団の対立を即決にやめさせることは困難だが、長い眼で見れば、そうした対立を寛解させる良薬はある。相互の人間的理解に基づく寛容と共生・連帯の精神である。これは次のcの解決要件でもあるから、そこでその培養の仕方を考えてみよう。

c　政治的対立の止揚・とくにその最大因、ナショナリズムの克服

戦争を惹き起こす政治的対立の最も大きな原因は、各国家の利益（ナショナル・インタレスト）の衝突にある。利益にまつわる国民感情をも含めて、それをナショナリズムの対立と呼ぶことができよう。それぞれの国の利益の主張や、伝統的文化の誇りは、過度にならない限り、ごく自然な欲求の発露として認められるべきである。しかし、ナショナリズムはしばしば、度を越した要求や自己主張を膨らませて、他国民の利益や民族的文化を無視し、力にまかせた独善的な振る舞いに進み易い性質を持っている。そのような過剰な集団エゴイズムの抑制こそ、国際平和の条件であり、また諸国家に望まれる品位である。しかも今日の文明と地球の現状は、集団エゴの衝突を放置しては存続できない厳しい状況にある。そうした集団エゴの抑制には、諸国民がそれぞれの利益と主張を持つ主体であることの相互理解と承認、つまりは同感に基づく寛容が不可欠であろう。

ナショナリズムはこの点、視野も度量も狭く、人類の当面する世界問題と取り組む意識も乏しい。現代の人類が直面している地球規模の重大な事態を考えれば、それらの解決を志向しえないナショナリズムは、もはや「時代遅れ」の不適合思想といわざるをえない。諸国民は広い視野を持ち、地球のエコシステムを保全し、人類のみならず諸生物との共生を営みうるよう、寛容と連帯の自己学習を進めていくべきであろう。人々がコスミック（宇宙的）な視野の中に、「宇宙船地球号」の上に生まれた生物の進化を考えて、狭量なナショナリズムを越えた、共生の意識を育てていかなければならない。

d　軍備縮小その他の平和条件の整備

人間を殺傷し、環境を悪化させる大量破壊の兵器が、今日ほど沢山作られ、広く保有された時代はない（核の増大・蓄積は最大の脅威だが、軽兵器だけでも七億丁にも及ぶという現状は、異常という外はない）。これまでの経験によると、軍縮に失敗し、軍備競争が続くと、大戦争に発展する公算が非常に高くなる。逆に〝武器がなければ戦争にならない〟という単純な事実を考えれば、軍備の縮小（更には撤廃）こそ、戦争を防止する最大の条件となることが明らかになる。問題はこの軍縮をどのように進め、成功させるかにある。

――ナショナリズムを始め、軍縮を阻碍す